

## 【発表 NO.2】

## 実践発表

## 複数言語環境で育つ高校生の成長を支える日本語教育を考える

## —3年間の授業実践の振り返りと卒業生の語りをもとに—

乗本 愛子（白鵬女子高等学校 日本語コーディネーター）

## 1. 本発表のねらいと実践の場

本発表は、高校における3年間の日本語教育実践から生徒Jの様子を振り返り、卒業生になった生徒Jの語りを通して、複数言語環境で育つ高校生の成長をどのように支えることができるかを考察する。特に、実践を通して見られた生徒Jの日本語能力の伸長が、学びの広がり、進路実現、「生き方の軸」の確立へと繋がった経緯を明らかにする。そして高校における日本語教育のあり方について考えることを目的とする。本実践の場は、横浜市にある私立女子高等学校（以下、本校）である。本校は、週6時間の取り出し授業の形態をとり、生徒の日本語能力や認知発達段階を踏まえた活動型授業を実施し、生徒が主体的にことばを学ぶことを目指している。

## 2. 生徒Jの成長を促す実践と工夫

## 2.1. 対象生徒の概要と課題

中国圏出身の中学1年時に来日した生徒Jは、約3年間日本語授業に参加した。入学当初、日常会話は可能であったが、学習場面では、サポートなしに内容を理解し思考をまとめて発表することは困難であった。真面目な性格である一方、自信をもって意見が言えないことが課題の一つであった。生徒Jは当時を振り返り、「発表するのが苦手だった。新しい環境に慣れるのに時間がかかる」と語っている。

## 2.2. 実践概要と目標、指導の工夫

本発表では、生徒の言語能力や認知発達段階がわかるように各学年から主に1つ、特に対象の生徒Jの生き方の軸が描かれている実践を選んだ。以下の表1が実践の概要である。

＜表1 実践概要＞

実践の時期	実践内容と授業回数	クラス形態	成果物
1年時 2021.9	スピーチ発表会（対象年度はクラス内発表） —スピーチの型、原稿作成と発表 8回	一斉授業	発表原稿
2年時 2022.6-8	校外のエッセイコンテストへの応募 —エッセイの構成5回、メールにて原稿推敲3回	一斉授業	発表原稿
3年時 2023.6-8	志望理由書の作成—進学先調べ、自己分析、活動履歴、ピア活動 5回、メールにてフィードバック2回	一斉授業	ワークシート、志望理由書

実践目標は、文脈の中で日本語を使い、社会での役割や進路を見出すこと、そして「自信をもって意見を表現できる力」を育成することであった。このため、生徒Jのペースに合わせた個別支援、意見形成を促す話し合い、主体的な発表機会の創出、活動型教材で主体的な学びを促す「ユニット教材」（人見・河上、2015）や技能特化授業の活用といった多角的な工夫をした。

## 3. 結果と考察—日本語能力の伸長と生徒Jの変化から

講師による複数言語を資源とした日本語能力の見立て、成果物に見られる文章構成力、生徒Jの語りの3点をデータとして考察した結果、日本語能力の伸長は、生徒Jの自己認識を大きく高め、自らの課題に挑戦する過程で、自己実現へと繋がっていったことが考察された。

### 3.1.日本語能力の質的伸長

生徒Jの日本語の発達段階は、JSLバンドスケール（川上、2020）を用いて講師が見立てた。JSLバンドスケールはレベル1（初めて日本語に触れる段階）から8（日本語の力が十分にある段階）に設定される。担当講師3名による4技能の判定平均値は以下のとおり推移した。このレベルの推移は、生徒Jの複数言語を資源とする日本語能力が、基礎的なやりとりから、より高度な学習言語の運用へと伸長したことを示している。

時期	生徒Jの日本語能力についての記述から抜粋	ことばの力のレベル
1年生 6月	学習場面では、独力でまとめて話すことは難しい。補助があれば、身近な話題で書くことができる。文章をおおまかに理解することができるが、大意を理解できない。	レベル4：日本語によるやりとりの範囲が拡大しているレベル
2年生 6月	日本語だけでやりとりを続けられる。自分の経験したこと、意見などは、自力で400字程度書くことができる。抽象的な概念や新しい語彙は理解が難しい。	レベル5：さまざまな生活場面で日本語を理解できるようになるが、学習場面では限られているレベル
3年生 6月	文法的な誤用は残るが、日本語で十分やりとりができる。日本語で構成を考え、簡単に内容をメモし、600字程度の文章を1時間程度で書くことができる。	レベル6：日本語を理解し、学習が進むレベル

### 3.2.論理的構成力の獲得

生徒Jの3年間の成果物については、当初まとめがわかりづらい作文であったものが、エッセイや志望理由書の作成を通じて抽象的なまとめや明確な段落構成が可能となった。これは、日本語での思考の整理・構造化能力の発達を意味する。

### 3.3.学びの広がり

1年時に発表に強い緊張を見せていた生徒Jは、個別の支援を受けながら日本語で発表をやりきる体験を重ね、徐々に自信を獲得していった。2年時には「ホスピタリティの授業で国際社会問題に対し意見を出せるようになった」と語り、日本語の習得により「他の分野でも勉強できることが増えた」と、新たな学習意欲と自己肯定感の広がりを実感している。

### 3.4.生き方の軸を確立し未来の行動へ

生徒Jの語りは、日本語能力の伸長が内面の変化と主体的な未来への行動へと直結していたことを示唆している。1年時の「日本語教師になりたい」という夢は母校での高校生への日本語支援に、2年時に描いた社会問題への関心は希望大学での国際社会問題学習へと繋がり、自身の言葉通り自らの「生き方の軸」を着実に実践している。

## 4.日本語教育実践の意味と課題

生徒Jの語りは、実践を通じた生徒Jの日本語能力の伸長が自己認識を深め、学びの広がり、進路実現、そして「生き方の軸」の確立に影響したことを示す。自己の生き方を問う日本語教育実践は、日本語能力の向上のみに留まらず内面変化と未来への主体的行動を促す自己実現の原動力となり得る。この事例は、高校での日本語教育が言語習得のみを目的とするのではなく、生徒が主体的に行動する「キャリアや人間形成の場」として機能し得る可能性を提示するものである。一方で、滞日期間の短い生徒の増加など、現状に即したカリキュラム構築が今後の課題である。

#### 【引用文献】

川上郁雄著(2020)『JSL バンドスケール【中学・高校編】— 子どもの日本語の発達段階を把握し、ことばの実践を考えるために』明石書店

人見美佳、河上加苗(2015)「初等中等教育レベルの「教材」を捉え直す—「ユニット教材」の提案」『ジャーナル「移動する子どもたち」—ことばの教育を創発する』6、pp.1-26.  
<https://gsjal.jp/childforum/dat/jccb06hitomi.pdf> (2026/2/14 取得)